自分の考えを持ち表現できる生徒の育成（１年次）

～「主体的・協働的な学び」を取り入れた課題解決的な授業を通して～

１　主題設定の理由

（１）社会の要請から

これからの社会は、「予測不可能な時代」だと言われている。高度情報通信社会やボーダーレス社会、超高齢社会などの言葉が登場して久しい。また、ＡＩの登場は、社会を激変させており、現在存在している職業の３０％は、２０年後には消滅していると唱える学者もいる。こうした急激な社会の変化に対応できるような生徒を育成するために２１世紀型能力という考え方が提示された。これは、国として、目指している教育の方向を示しており、言語　スキル、数量スキルなどの基礎力、問題解決・発見力・創造力などの思考力、自立的活動力、人間関係形成力などの実践力などで構成されている。すなわち、思考力を中核とし、それを支える基礎力と、使い方を方向付ける活用力の三層から成り立っているものである。これらの力を育む上でも、自分の考えを持ち、他者に対して、その考えを表現することは意義深いことである。（以下略）

（２）学習指導要領から

平成２９年３月に告示された学習指導要領では、これからの時代を担う児童生徒に生きる力を育むという理念のもと、いわゆる「学力の三要素」（基礎的・基本的な知識及び技能の習得、思考力・判断力・表現力等の育成、主体的に学習に取り組む態度の育成）を重視している。特に、思考力・判断力・表現力等を育むことは、我が国の児童生徒の実態を踏まえた喫緊の課題であり、「確かな学力」をバランスよく育むことが、学習指導要領に反映された。教育目標や内容が見直される一方で、「習得・活用・探究」という学習過程の中で、学級やグループで話し合い、発表し合うなどの言語活動や子ども自身が判断の根拠や理由を示しながら自分の考えを述べたり、実験結果を分析して解釈・考察し説明したりすることなどについて課題が指摘された。（以下略）

（３）本校の教育目標から

本校では、「志を持ち自ら考え行動できる生徒の育成」を教育目標に掲げて、教育活動を推進している。教育課題として、「意欲的な学習態度と学力向上」「人間関係を築く力の育成」をあげている。また、本年度、「相手の話を聞くこと、自分の考えをつくり、他者に伝えることができる生徒の育成」を重点目標としている。（中略）これらの教育目標・重点目標にも本主題は合致するものである。

（４）研究の経過から

本校では、再編を機に昨年度、「認め合い、支え合い、伝え合うことのできる生徒の育成～主体的な学びに向かう学習集団づくりを通して～」を主題として校内研究に努めてきた。研究を進めていく中で、認め合い、支え合い、伝え合うためには、その根拠となる「伝えたい材料」が必要であることがわかってきた。そこで、今年度は、原点に立ち返り、かつ昨年度の研究をさらに進化させていくことをねらった。新学習指導要領においても「言語活動の充実」は、依然として述べられており、自分の考えをつくり、協働してお互いの考えを出し合い、考えを修正して高め合うことを確認したいと考え、ＳＷＯＴ分析の結果も踏まえ、本主題を設定した。

２　主題の意味

「自分の考えを持つ」とは、様々な根拠を踏まえ、言語を通して論理的に思考した結果としての意見を持つことである。

３　副主題の意味

「主体的な学び」とは

生徒が見通しをもって粘り強く取り組み、自らの学習活動を振り返って次につなげる学び

子ども自身が興味をもって積極的に取り組むとともに、学習活動を自ら振り返って意味付けたり、獲得された知識・技能や育成された資質・能力を自覚したり、共有したりすることが求められている。

「協働的な学び」とは

他者との協働や外界との相互作用を通じて、自らの考えを広げ深める学び

身に付けた知識や技能を定着させるとともに、物事の多面的で深い理解に至るためには、多様な表現を通じて、教師と子どもや、子ども同士が対話し、思考を広げ深めていくことが求められている。

４　研究の目標

学習指導要領で求められる主体的・対話的で深い学びの実現を目指した授業改善を進めるとともに、「社会に開かれた教育課程」の考え方をふまえ、カリキュラム・マネジメントの実践を通し、資質・能力の育成を目指す取組を推進し、学び続ける宮原中の子どもの育成を目ざす。

５　研究の内容

（１）授業の改善

①「何を学ぶか」「どのように学ぶか」「何ができるようになるか」という三つの要素からの改善

「何を学ぶか」（学びの出発）

→各教科等で育む資質・能力を明確化し、目標や内容を構造化して授業を磨く視点の共有化を図り、授業改善に全員で協働して取り組む。「何を学ぶか」の視点は、育成すべき資質・能力を踏まえた目標・内容の見直しでもある。授業を構成するときに、今習得させたいことだけでなく、将来に必要になるであろう能力を考慮に入れながら考える必要がある。子どもが、社会や地域とつながりながら学んでいけるように、学校も教育課程を介して、社会や地域とつながっていくことが求められている。「子どもとはこうあるべき」という観念的な理解だけではなく、目の前の子どもを育成しようとするとき、基礎・基本をしっかりと定着させ、子どもの学びの履歴を把握することが必要になる。また、社会の要請やカリキュラムへの対応等といった要素を考え、変化の早い知識基盤社会への対応、学び続ける姿勢、他と協働できる能力の育成を行う必要がある。

「どのように学ぶか」（学びの再思考）

→学習プロセスの視点に立って「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」という三つの学びで構成する。

「何ができるようになるか」（学びの獲得と新たな学びの創出）

→「主体的・対話的で深い学び」を通して、「何を理解しているか、何ができるか」「理解していること・できることをどう使うか」「どのように社会の変化に対応できるような児童生徒を育成する学び

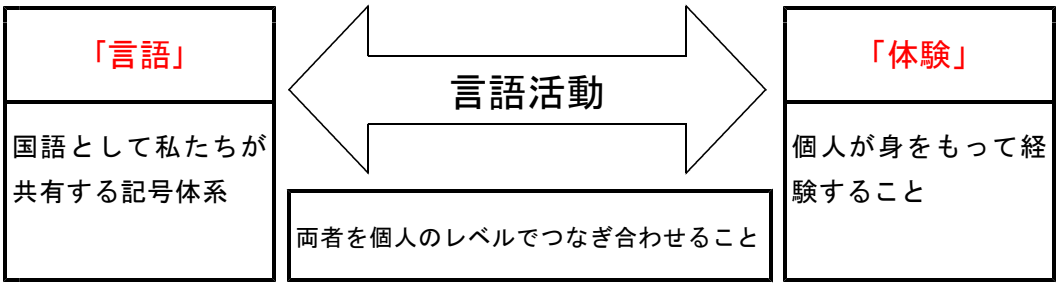
②言語活動の見直し

１　体験と言語を結び付ける言語活動

前回の学習指導要領の改訂において、各教科等における言語活動の充実は、重要な改善の視点であり、今回の改訂においても、学力を向上させる重要な活動であるとされている。「言語活動の充実に関する指導事例集」（文部科学省）では、「各教科等においては、国語科で培った能力を基本に、それぞれの教科等の目標を実現する手立てとして知的活動（論理や思考）やコミュニケーション、感性・情緒の基盤といった言語の役割をふまえて、言語活動を充実させる必要がある」とされ、言語活動を各教科等の目標実現のための手立てとして捉えることを示している。そこで、言語活動が、各教科等における協働的な学び合いをさらに高めると考え、今年度、見直すこととした。

そもそも、学習活動の基盤となるものは、広い意味での言語であり、言語活動の充実を図る際に、次の２点に留意した。①言語活動が生徒の課題解決の過程となるようにする→各教科等の特性を踏まえた言語活動の視点を明確に。②相手や場に応じた語彙の選択　→体験をとおして獲得する感覚【図１】参照を大切に。

【図１】



言語活動を取り入れた場の設定

自分の考えをつくる→小集団での交流→全体での交流

全教科での取組【共通性】

① 単元構成の工夫(別添資料参照)

ア 自分の考えをつくる

イ 小集団での交流

ウ 全体での交流

② 言語活動の充実

ア 学習指導案の充実

イ 学習過程の充実

⟺

教科の取組【独自性】

※ 各教科でめざす生徒像の明確化

↓

重点化・手だて

↓

教科経営案

教科学力向上プラン

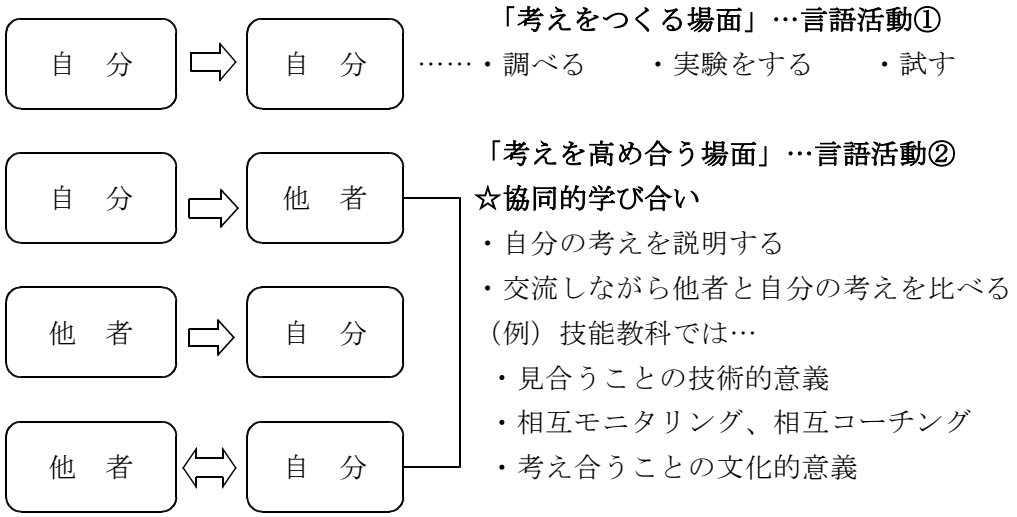
（２） ４つの意識（目的・相手・場・方法）を持たせる言語活動

ア 何のため（目的）に、だれ（相手）に言語活動を行うのか明確にする。

①授業では、言語活動の充実の目的を明確にした主眼を設定することが大切。

②「活動あって力なし」ということにならないためにも、言語活動の充実は、教科の目標を達成するための手だてとすることが重要。

③言語活動は「目的」ではない。送受信の対象を明確にする相手意識を持たせることを授業の中で意識をする。



イ　どこ（場）で、どうする（方法）のかを明確にする。

どこで？	・考えをつくる場面 ・ひとり学び ・交流の場面	どうする？	・説明 ・要約 ・討論
・子どもが主体的に考え、表現する場を設定する。		・教科の目標達成のために必要な言語活動 ・教科特有の概念や用語を用いた表現	

言語活動の充実を図る授業づくり２つのポイント

ポイント1　４つの意識（目的、相手、場、方法）をもたせましょう

①何のため（目的）に、だれ（相手）に言語活動を行うのかを明確にしましょう
・授業では、言語活動の充実の目的を明確にした主眼を設定することが大切。
・言語活動の充実は教科の目標を達成するための手立てにすることが大切。
・言語活動の充実は送受信の対象を明確にする相手意識をもたせることが大切。
②どこで（場）、どうする（方法）のかを明確にしましょう
・どこで・・・・児童生徒が一人学びや交流（ペア、班、全体等）の場で
・どうする・・・教科のねらいを達成するために必要な記録、要約、説明、討論等の言語活動を設定。その際、教科特有の概念や用語を用いて表現。

ポイント2　ゴールの姿が目に浮かぶように、はっきり、くっきり、すっきり

〇なぜ、こうするとよいのか？
・主眼達成の有無についての判断が明確に。
・思い描いたゴールの姿が出なかったときには、ゴールに無理があったのか、それとも、この姿に迫る手だてに効果がなかったのかを判定すればよい。

思考力・判断力・表現力等を育成する言語活動

①体験から感じ取ったことを表現する
②事実を正確に理解し、伝達する
③概念･法則･意図などを解釈し、説明したり活用したりする
④情報を分析･評価し、論述する
⑤課題について、構想を立て実践し、改善･評価する
⑥互いの考えを伝え合い、自らの考えや集団の考えを発展させる

各教科における言語活動の例

＜国語科＞
・読み取った文章を文章の内容や表現を生かしながら要約する。
・着眼した叙述や文章構成を根拠に挙げながら文章の内容や表現について話し合う。

＜社会科＞
・根拠となる資料（データ)、資料から読み取ったことを挙げながら考えを説明する。
・見学や調査をして分かったことを絵や図、言葉を用いて報告する。

＜数学科＞
・既習の知識や技能を基に問題解決のための方法や手順について話し合う。
・事柄が成り立つ根拠や理由を言葉や数、式、表、グラフなどを用いて説明する。

＜理科＞
・既習経験を基にした仮説を立て、追究の視点や方法について話し合う。
・観察・実験の結果（データ）を根拠に挙げながら自分の考えを説明する。

＜音楽科＞
・想像したことや感じ取ったことを音楽的要素や仕組みを根拠に挙げながら説明する。

＜美術科＞
・自分の作品のよさを表現主題と造形的要素や表現技法とをつないで紹介する。
・作品から感じ取ったことを造形的要素や表現技法に着眼しながら説明する。

＜技術・家庭科＞
・実習などで体験したことや調査したことを図や表、言葉を用いて報告する。
・生活を改善する方法を考え、データを示したり実演を交えたりしながら紹介する。

＜保健体育科＞
・作戦などの話し合いに貢献しようとする。
・集団的活動や身体的表現を通じて他者と交流しようとする

＜外国語科＞
・与えられたテーマについて簡単なスピーチをする。
・話の内容や書き手の意見などへの感想や賛否、その理由を話したり書いたりする。
・身近な場面の出来事や体験したことなどについて、自分の考えや気持ちなどを書く。

「言語活動の充実」自体が目的化したり、単に活動することだけに終始したりして各教科等の特質に応じていない授業ではいけない。

（３）「根拠と納得」の基本的学習過程による学習指導

☆学習過程

学習過程	学びの姿(例)
つかむ （導入） ⇩ **見通す** ⇩	学び合おうとする「めあて」の設定 ・個の高まりの「めあて」から学び合いで集団を高める「めあて」へ 〇数学科の例 〈これまで〉「～について調べよう」 ↓ 〈これから〉「 ～のどの方法が簡単か比べて説明しよう」　交流の観点　言語活動 調べる視点・方法＋表出の手段 ・根拠を明確にすることを見通す ・方法の多様化を意識して見通す ・既習事項、仮説等の複線化
調べる （展開Ⅰ） ⇩	根拠をつくる（操作・体験…） ↓　（資料・試行…）　**個の学習の質の高まり** 表 現 す る　（可視化・順序） 〈これまで〉・「絵や図」「言葉」「数・式」を相互に関連付けて説明 ↓ 〈これから〉・多様な考え方や方法をもとによりよい方法の根拠を主張 **学び合い**
高める （展開Ⅱ） ⇩	結論と根拠の表出　**集団としての学習の質の高まり** 賛意や批評　代案の考案　思考の深化へ 〈これまで〉・班やペア、全体で出し合う。 ↓ 〈これから〉・自分の考えを主張したり、友達の考えと比べたりする。根拠をもとに。
まとめる （終末）	追究・学び合いの過程と成果との関連付けメタ認知 〇道徳の例 ・友達と考えを練りあって導き出した納得のいく言葉を観点としてこれまでの自己を振り返らせる。